

〈学会参加記〉

第 4 回アジア農村社会大会に参加して

倪 卉

第 4 回アジア農村社会大会 (ARSA) は 2010 年 9 月 6-10 日に、フィリピンのレガスピ市 Bicol University で開催された。

私は第 3 回の ARSA 大会にも参加したので、今回は 2 回目となる。他の国際学会にも参加したことがある。豊富ではないが、若干感じたことを整理しておきたい。今後、国際学会での発表を考えている皆さんに少しでも役に立てば、幸いである。

学会の日々

今回の ARSA はレガスピ市という小さな街で開催されるということで、飛行機の便の不便も考え、前日に現地入りした。翌日学会の初日、朝から Bicol 大学の数十人の女子学生たちが正装し、会場入り口の両側に立ち並び、絶えず「Good Morning」や「Welcome」の挨拶が飛んでくる。何回も学会に参加した経験があるが、こんなに盛大な歓迎を受けたのは初めてだ。受付を待つ列に第 3 回 ARSA で出会った知人に再び会えて、とても感動的なひと時を過ごした。

午前中は Opening Ceremonies と基調講演が予定されている。開会式には予想のとおり大会の関係者や開催地の大学、政府のお偉いさんたちのお言葉が続いた。どんな人が来られるかで、現地政府の学会への態度が伺える。今回の ARSA にはレガスピ市所在省の省長が来られた。初日の基調講演がとても印象深い。一つはフィリピン人研究者によってフィリピンの状況を紹介するものだった。彼はフィリピン政府を批判しながら、過度なメトロマニラへの一極集中の状況を分析し、極めて不均等な地域経済発展状況を会場各国からの研究者達に訴えた。彼の口調は演説らしく抑揚頓挫で、とても印象に残る講演だった。確かに、学会初日の基調講演にはご当地の状況を紹介する内容はしばしばある。北京近郊で開催された第 3 回 ARSA にも、中国経済を顕彰する講演で、内容は、中国経済は如何に発展し光明な前景であるか、とつまらないものだった。でも今回の ARSA の基調講演はひと味違った。もう一つは日本人の研究者だった。前半は晦渋な社会学理論が並べられたが、後半には地域研究を重視すべく、各地域の特徴とその個性の認識は現在の研究に重要であることを主張した。

私の報告は初日の午後の個別報告の一番だった。同じセッションにエビの養殖やパーム油に関するものもあった。私の報告に対する質問は 4,5 個もあり、座長の先生から研究の理論的背景に関する助言も頂けたので、かなり収穫があった。学会報告の後の質問から学べるものは実は報告自身より遥かに多いと感じる。学会で発表をし、自分の研究発表に対し、質問という形で他の研究者との交流が出来ることは学会に行く大きな意義であると思う。この考えは今回の ARSA で報告して、さらに確信することができた。

学会初日は無事終了し、次の日も一日個別報告のセッションだった。幾つかのセッションを聞いてみたが、やはり事例研究が多かった。理論ではなく、数多くの事例研究をどうみるのか、一人の日本人先生はこう解釈する。他人の事例研究を聞いて、それを自分なりに受け止め、自分の研究に役立つ一部として吸収できることが大事だとのことである。そして、三日目は Field Trip の日だった。朝からバスで近くのタバコ市にいて、船で向かい側の小さい島へ向かった。島の村は Bicol 大学の共同プロジェクトの対象の一つであり、村の農業や漁業などの状況を対象として研究を行っている。同時に村おこしプロジェクトとして他の研究機関と共同で行っている。帰りにはマヨン火山近くにある陶器を作る小さな村もたずねた。そして、学会の最終日、やはり前日のツアーで疲れた参加者が多かったかみしれず、午前中の基調講演に欠席が多かったようだ。午後の閉会式になるとまた人が増えてきた。記念撮影が絶えず、最後の晚餐を楽しみ、4 日間も続いた第 4 回アジア農村社会大会の幕が閉じた。

「万巻の本を読む、万里の路を歩む」を目指して — ARSA で得たもの

学会で報告したことは当然一番の収穫である。そして、さまざまな報告を聞いて、さまざまな人に出会ったこと。もちろん、学会開催地であるフィリピンを訪ね、初めての東南アジア国で経験した日々。

紙面の制限もあり、僅かの浅い経験しか書けないが、それでもこのままの感想を正直に書きとめ、これを参考に出来るだけ多くの若手研究者の皆さんに、積極的に国内・国際の学会へ足を運んでいただきたい。積極的に自分の研究成果を発信し、それによって自分のネットワークを広げ、何よりも自分の身を持ってこの世界を感じていただきたい。

(京都大学大学院経済学研究科)